http://www.music-communication.com

神戸女学院大学

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2023 年度 活動報告書

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 1 2024/04/11 22:31

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 2 2024/04/11 22:31

音大連携による教育イノベーション：音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2023 年度　活動報告書

目　次

はじめに …… 2

教員・スタッフ紹介・2023 年度活動概要 …… 3

2023 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

1．第 1 回　ワークショップの現在を意味と仕組みから考察する …… 4

2．第 2 回　全ての子ども達にオーケストラ体験を！山形交響楽団の挑戦
～オーケストラに秘められた可能性…コロナ禍を乗り越えて～ …… 6

3．第 3 回　老いを巡るダンス・ドラマトゥルギー …… 8

4．第 4 回　誰一人取り残さない社会に向けて、芸術でできること …… 10

5．第 5 回　音楽ワークショップの現状と課題 …… 12

6．第 6 回　ようこそ先輩シリーズ：パリよりこんにちは、音楽家というパフォーマー、
やる気、行動力、運気を掴む …… 14

7．第 7 回　音楽教育と心理的安全性「より自分らしくなること」…… 16

8．第 8 回　音楽アウトリーチで育まれるもの …… 18

9．第 9 回　芸術の役割～ Nature Centered の視座の獲得～ …… 20

10．第 10 回　東京音楽大学 実習報告 …… 22

11．第 11 回　神戸女学院大学 実習報告 …… 23

12．第 12 回　総括 …… 24

各大学実習報告

1．東京音楽大学
第 13 回みないけキッズアーティスト「音楽で作ろうみんなの夏物語」…… 26

2．東京音楽大学
「2023 年度特別セミナー」ならびに
音楽作りワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」…… 27

3．神戸女学院大学
「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに
第 11 回「音で遊ぼう！」子どものための音楽作りワークショップ …… 30

おわりに …… 34

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 1　2024/04/11 22:31

はじめに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も 15 年目を終えようとしています。対面による授業のみならずワークショップそのものの開催もできなかったコロナ禍を乗り越えて、やっと通常の授業形態と日常生活が戻ってきました。十分なディスタンスを取ること等、2 年以上に渡って何事にも慎重でしたが、やっと緊張が解け、よいコミュニケーションの場が戻ってきたように思います。

今年度は SDGs の考え方に基づき、誰一人取り残さない社会に向けて、音楽で何ができるのかを多様な方向から考えてみました。ただその一方で、もはや「強い者が弱い者を助け、できる人ができない人を導く」という図式が通用しなくなってきていることを感じます。そうした意味で今年度は、単にワークショップの手法を学ぶのみならず、自分自身の強みと弱みを知り心理的安全性の中で自分を拓くこと、そして自分の感性や思考方法の根幹について考えてみることなどが講義のテーマに加わりました。音楽を通してコミュニケーションを図る感性とともに、それを説明し共有するための思考と言語を養うことが、本講座における今後の学びの焦点になるであろうと考えております。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。1 年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々に広くご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

2024（令和6）年 3 月

武石みどり（東京音楽大学・教授）

＊開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座 A・B（東京音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 2 2024/04/11 22:31

教員・スタッフ（令和６年３月現在）

東京音楽大学	武石 みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	赤木 舞		非常勤講師
	坂本 夏樹		連携センタースタッフ
	磯野 恵美		連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実	神戸女学院大学音楽学部	名誉教授
	小林 瑠那		連携ルームスタッフ
	玉置 華		連携ルームスタッフ

令和５年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

今年度の全体テーマ「誰一人取り残さない社会に向けて、音楽でできること」

オリエンテーション：令和５年４月 14 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第１回：令和５年５月 19 日（金）	発信校：東京音楽大学
第２回：令和５年５月 26 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第３回：令和５年６月９日（金）	発信校：神戸女学院大学
第４回：令和５年６月 23 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第５回：令和５年７月７日（金）	発信校：神戸女学院大学
第６回：令和５年７月 21 日（金）	神戸女学院大学のみ
第７回：令和５年 10 月 20 日（金）	発信校：東京音楽大学
第８回：令和５年 11 月３日（金）	発信校：東京音楽大学
第９回：令和５年 11 月 24 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 10 回：令和５年 12 月 15 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 11 回：令和６年１月 12 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 12 回：令和６年１月 19 日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

令和５年９月１日（金）於：東京音楽大学
第 13 回みないけキッズアーティスト「音楽で作ろうみんなの夏物語」

令和５年９月 16 日（土）～ 18 日（月）於：東京音楽大学
「2023 年度特別セミナー」ならびに音楽作りワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」

令和５年９月 20 日（水）～ 23 日（土）於：神戸女学院大学
「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに第 11 回「音で遊ぼう！」子どものための音楽作りワークショップ

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 3 2024/04/11 22:31

2023 年度　第 1 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップの現在を意味と仕組みから考察する」
講　師	苅宿 俊文（青山学院大学社会情報学部教授）
実施日時	2023 年 5 月 19 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	第 1 回「ミュージック・コミュニケーション講座」は、青山学院大学社会情報学部教授である苅宿俊文氏を講師に迎えた。苅宿氏は 2009 年に青山学院大学ワークショップデザイナー育成プログラムを立ち上げ、ワークショップ人材を輩出されてきた。2019 年にはプログラム修了生が 2000 人を突破している。今回の講義は、ワークショップにおける教育学の視点を中心とした歴史や背景について、ワークショップの定義と目的、さらにワークショップの企画書を作成することを踏まえた具体的な実践例など、多岐にわたる内容であった。 はじめに、ワークショップの歴史的な解説がされた。ワークショップは、ジョージ P. ベーカーが 1905 年にハーバード大学の演劇教育の講座として実施した「47Workshop」が起源であり、プラグラマティズムの考え方が背景にあるという。その後、1936 年オハイオ州立大学にて、進歩主義教育協会が主催した教師教育としてのワークショップが実施された。日本では、1947 年の「教員養成のための研究集会」が最初のワークショップであり、意外にも戦後まもない時期からワークショップが実施されていた。 続いて、中野民夫氏によるワークショップの定義「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加･学びと創造のスタイル」が紹介され、ワークショップの目的はコミュニティ形成（仲間づくり）のための他者理解と合意形成のエクササイズであること、またワークショップの範囲には多様性がみられ非常に幅広いことなどが示された。さらにワークショップの場面の定義として、「協働性」「即興性」「身体性」「自己原因性」の 4 つのキーワードについての解説があった。協働性確認のワークの具体例としてお箸を 2 人で運ぶ競争の紹介があり、間主観性についてのワークは、実際に学生が 2 人 1 組で体験した。学生たちは、実際にワークを体験することにより、ワークショップは誰でも参加できる場であることや、競争などを行った後には最終的に皆が仲良くなる時間を作る必要性を体感した。苅宿氏は、視覚よりも聴覚の方が鋭敏であるため、音楽を活用したワークショップが有効であることを示唆するとともに、特に子どもを対象としたワークショップでは、年齢が近い音大生が積極的にワークショップの実践者として関わってほしいと語った。 ワークショップは何を伸ばすのかーそれは非認知能力である。特に性格・資質的要素の強い非認知能力の要素として、協働力、コミュニケーション力、主体性、自己管理能力、自己肯定感が挙げられ、その他にも実行力、統率力、創造性、探究心、共感性、道徳心、倫理観、規範意識、公共性が含まれることが示された。苅宿氏は、音楽ワークショップにおいても、これらの非認知能力を伸ばすことが期待できると語っていたことから、音楽の特性を活かしたワークショップの可能性を感じた。 これに関連して、ヴィゴツキーによる発達の最近接領域についての解説があっ

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 4　2024/04/11 22:31

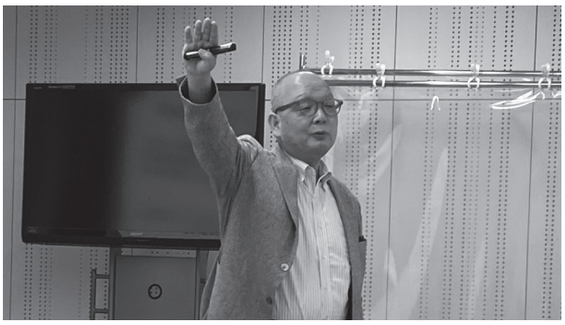
講座の概要	た。「ひとりではできない領域」「支援者がいればできる領域」「ひとりでできる領域」の３つの領域の中で、ワークショップを実施する上で重要なのは「支援者がいればできる領域」であり、この領域をどのようにデザインしていくかが鍵となる。音楽ワークショップにおいても、一人ひとりが創作・演奏に参加できるよう、ワークショップリーダーがどのように音楽要素を提供しサポートしていくか、その匙加減が重要である。 講義の終わりに「自己効力感や肯定感を大学生から高めるにはどうしたら良いか」という学生からの質問に対し、苅宿氏は、成功体験を意識的に積んでいくこと、また自分の中に「できるはずだ」「できるようになってきた」ということを言葉で（聴覚で）認識する、つまり自分の言葉を自分で聞くことが重要であると述べた。ワークショップに関する知見を深められただけでなく、音楽分野にも応用できるようなヒントや、学生への力強いエールもいただいた講義であった。

〈学生のことば〉

・ワークショップは、学習者中心の教育であり、参加者みんなが意見を出し合えるようにするには、心理的安全性が必要であることが分かった。人が言ったことを否定するのではなく、敬意を持つことが大切だとおっしゃっていたが、それはワークショップに限らず常日頃から大切なことで、指導者としてどうあるべきかを考えさせられる授業だった。正解の多様性をどう扱うか、他者理解や合意形成には、自分達の力量が試されるので、さらにワークショップでの対応や指導について学びたいと思った。ネガティブなことなどは自分にも当てはまるので、自己分析し、小さな成功から自信に繋げられるよう「できるようになってきた」→「できるようになっていく」の循環ができるように頑張りたい。　（東京／ピアノ／４年）

・ワークショップは参加者に新しい経験を提供する場という認識だったが、それだけではなく、数値化できない非認知能力を伸ばすのに効果的だと知った。特に、自己管理能力が伸びるということは想像もしていなかったので驚いた。他者とフラットに意見を交わすうちに、自然と自分のことも客観的に捉えられるのだろう。また、教える－学ぶという役割にとらわれず、学習者中心の教育を実行するにはどうすれば良いかと考えた時、主催者がどういったリアクションをするかが重要なポイントであると思った。例えば私が参加者の立場なら、主催者や周りが新しい意見を積極的に自身の糧にしようとする姿勢を見たら安心すると思う。その点で、ワークショップはどちらの立場にとっても学びを得る機会かもしれない。心理的安全性ははじめて聞く言葉だったが、自分を否定されないという安心感を確保することは、自己肯定感や意見を伝える力を育むだけでなく相手を尊重することも学べるので、必ず覚えておきたい。

（神戸／１年／ピアノ）



※写真は東京音楽大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 5　2024/04/11 22:31

2023 年度　第 2 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 2 回ミュージック・コミュニケーション講座 「全ての子ども達にオーケストラ体験を！山形交響楽団の挑戦 ～オーケストラに秘められた可能性…コロナ禍を乗り越えて～」
講　師	西濱 秀樹（山形交響楽団協会専務理事兼事務局長）
実施日時	2023 年 5 月 26 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部会議室（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	第 2 回「ミュージック・コミュニケーション講座」は、山形交響楽団協会専務理事兼事務局長の西濱秀樹氏を講師に迎え、Zoom にてご講義いただいた。 西濱氏は 1995 年、オーケストラの存続を訴えるシンポジウムでの発言をきっかけに関西フィルハーモニー管弦楽団に入社。2003 年から 2011 年まで理事・事務局長を務め、楽団の法人化と黒字化を達成した。2015 年 5 月に山形交響楽団協会専務理事兼事務局長に就任。2018 年 6 月より日本オーケストラ連盟専務理事を兼務。 はじめに西濱氏自身の社会経験をお話しいただき、日頃から努力をすることは当然のことであるとした上で、現在のポジションに身を置けているのは「縁」と「運」によるものだと語った。自身が最高潮に達している時に最高のポジションがあること、そしてそこに繋がる縁を持っていることが重要であり、その「縁」を繋げるのが芸術団体の役割だと西濱氏は述べた。 山形交響楽団は 6 月に「さくらんぼコンサート 2023」を東京と大阪の 2 都市で行った。「さくらんぼコンサート」では、演奏会当日の朝に摘んだばかりの山形のさくらんぼが観客全員にプレゼントされる。楽団の演奏や芸術、個性を披露する場であると同時に、観光親善大使のような役割も果たす、これを率先して行ったのは山形交響楽団だった。 コロナ禍で人が集まることが禁じられ、人々の心の灯であるはずの芸術を止めることを要求された。西濱氏は、芸術を生業とする人間として、ただ演奏会を中止するだけで良いのか、それは演奏家の社会的存在意義を打ち消すことになるのではないかとの疑問を抱き、無観客ライブ配信を行った。 2020 年 3 月 14 日、山形交響楽団は定期演奏会を初めて無観客ライブ配信で開催した。リアルタイム視聴者数は約 3 万人、うち約 9000 人は指揮者の「縁」があったヨーロッパの人々であった。以降 2021 年 3 月までの 1 年間、山形交響楽団は 14 回のライブ配信を無料で行った。歩みを止めないことを主眼に、新しい活動を見出していった。6 月にはガイドラインに則って活動を再開、7 月には有観客で開催した。またライブ配信では、演奏会の休憩時間に山形の魅力を紹介する動画を流した。 この間に予定されていた学校公演全 77 回のうち、34 公演が中止となり、子どもたちに山形交響楽団の演奏を届けることができなかった。ライブ配信を観られない家庭もあることから、同団は県内の全学校・図書館にベートーヴェン交響曲選集 DVD を寄付する “Music Library Project” を行い、失われた体験をカバーしていった。 寄付等を基に、コロナ禍でも事業の拡大や社会への還元を進めていった。地

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 6　2024/04/11 22:31

講座の概要	方都市の経済基盤は小さく、その中で活動を続けていくには、「頭を使うこと」「動くこと」「全ての活動に意義をつけること」「縁を繋いでいくこと」が重要だと語る。50 年前に山形交響楽団の演奏を聴いた当時の子どもたちが、遠方より演奏会に駆けつけることも多い。これは同団が山形の街に存在し、活動し、成長してきたことから生まれた「縁」である。 　現在、山形県内 35 市町村の全てでコンサートを行い、山形の観光資源に足を運んでもらうための動きを増やしている。「さくらんぼコンサート」は山形の魅力を全国に発信する方法の一つだ。アジア・ヨーロッパを次の市場として、各国各地でのコンサートホールのロビーで山形物産展を併設したコンサートの実現を狙う。数年後のヨーロッパ・ツアーを目標に、世界への展望を見据える。 　最後に「山形交響楽団がそんな想いを持って世界に羽ばたいていくとおもしろくないですか？そんなことを真剣に考えながらこのオーケストラを率いているのです」とチャーミングに締めくくった。

〈学生のことば〉

・今日の講義の中で、縁と運の話が印象に残りました。縁は芸術が繋げるものであり、その芸術は人々が困難に陥る中で人々を支え続けるものであるということに衝撃を受けました。今起こっているウクライナとロシア間の戦争は、国民にとってはもはや「運」だともいえる状況であるかもしれません。そんな中で日本に渡り、芸術を通して自らを支え続け、平和を呼びかけ続けている方々のことが脳裏に浮かびました。（神戸 / ピアノ / １年）

・芸術が人と人を繋ぐ縁としての役割を果たせるのは、こうして社会を豊かにしたい、変えていきたいという強い思いを持っているすべての人のおかげだと思いました。各自が自分にできる努力を積み重ねた先に、運と縁によって人生が好転することがあると聞いて、常に広い視野で物事を見る大切さを実感しました。マネージメントにおいて、地域に密接に関わって、食や園芸など音楽に直接の関係がなさそうなことを利用して地域創生に役立てるといった発想力やそれを実行する縁は、凝り固まっていない思考があってこそだと思います。山形交響楽団のさまざまな取り組みについて話を聞くことができて、中でも農業や園芸、食など地域創生にも深い意味を持つ分野に音楽が融合することで役に立てたという点が印象に残りました。（神戸 / ピアノ / １年）

・出会いというのは貴重で大切だということが分かりました。まさに一期一会という言葉を想起させるお話でした。山形交響楽団という団体がどのようにして地元に貢献しているかがよく分かりました。子どもたちへの教育も行いつつ、文芸復興に努める活動はすばらしいものだと思います。特に DVD を寄贈したというエピソードが印象に残りました。その他にも、実績を伴う活動の数々に興味を惹かれる講義でした。また、企業の音楽活動などに対する取り組みも知ることができて嬉しかったです。（東京 / 弦楽器 / ３年）

・今回の講義を聞いて、普段とは違う困難な状況に置かれた時に、最初に何を考えて、実現するためにどのように行動するかなど多くのことを学びました。西濱先生が、コロナ禍での無観客ライブ配信や学校への音楽教材の寄付など、今の瞬間だけではなく数年先のことも踏まえて企画を考えたり、全ての行動に縁を結べるように行動することが大切だとおっしゃっていて、自分もそういう行動力と思考力を大切にしていきたいと感じました。（東京 / ミュージック・メディア / １年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 7　2024/04/11 22:31

2023 年度　第 3 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「老いを巡るダンス・ドラマトゥルギー」
講　師	中島 那奈子（ダンス研究、ダンスドラマトゥルク）
実施日時	2023 年 6 月 9 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部会議室（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	第 3 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、ダンスドラマトゥルクの中島那奈子氏を講師に迎え、Zoom にてご講義いただいた。 中島氏は、京都を拠点に活動するドラマトゥルク。「老い」をテーマに、京都芸術劇場春秋座やカナダ・総合文化施設バンフセンターなどで作品づくりを行う。 ドラマトゥルクとは、リサーチなどの知的作業によって作品創作をその過程から支える役割を指す。日本ではまだ広くは知られておらず、演出家や振付家を支えるサポートスタッフのように関わることが多い。「高齢者」や「老い」は、中島氏自身の踊りの経験から繋がっているキーワードである。今回は「『高齢者』を取り残さないこと」にポイントをおいて、お話しいただいた。 中島氏は、幼少期から日本舞踊を習い、そこで子どもからお年寄りまで幅広い年齢層と関わりがあった。日本舞踊は歳を取ることで踊りに味が出るという、高齢者に対する美意識がある業界である。20 代で中島氏は米国ニューヨークに留学するが、そこでは同世代のダンサーたちが既に引退を考えていることに驚き、また高齢者に対する敬意があまり感じられなかったという。その中でドラマトゥルクとしての活動も始め、その後、ドイツの大学院で舞踊学を修めた。 はじめに、学生に「踊り」「老い」に関するアンケートを行った。ダンスはどのくらい身近であるかや、高齢者の定義、高齢者との関わりの頻度などを匿名リアルタイムで集計し、受講生の率直な意見を炙り出した。「老い」にはどのようなイメージがあるかという質問に対して、体の衰えや死との距離などマイナスの印象を持つ回答が多かったが、知識の豊富さや人生の豊かさなどポジティブな意見も見受けられた。 次に、これまで中島氏が主体的に関わった、身体を扱うダンスにおいて大きな影響を及ぼす「老い」をテーマとする 3 つの作品の創作過程について、そこから生まれた問題や気づきについて紹介した。 【1．能から「Trio A」へ（2017 年 10 月 11 -15 日、京都芸術劇場 春秋座にて）】 すでに完成しているポストモダンダンス「Trio A」を、1 週間で踊り、公演を行うワークショップ。誰でも踊れるダンスと言われていたはずだが、高齢者には不可能であることを理由に、当時 82 歳の参加者が指導者に拒否される。中島氏が介在して高齢者でも参加できる方法を探った結果、「Trio A」を踊るダンサーの視線を高齢者が追いかける〈「Trio A」フェイシング〉という新たな上演方法を編み出して実現した。 【2．When my cue comes, call me, and I will answer.（2019 年秋、中国にて）】 中国国立バレエ団を引退した当時 81 歳と 58 歳のダンサーが、バレエではない新しい形のダンスを見つけようとする。全盛期と比べて身体は強張っており、それとどのように向き合い、ほぐしていくかを探った。彼らが過去を思い出し、

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 8　2024/04/11 22:31

講座の概要	また現在の状態と向き合うにつれて、乖離が生じる。２名のダンサーはそれらを乗り越え、新しい身体での表現を生み出していった。 【３．型の向こうへ（2023 年３月 11 日、京都府庁旧本館旧議場にて）】 「老いと踊り」をテーマにした３年間の研究活動。中国を拠点とする演出・振付家や能楽師、現役バレエダンサーなど、多様な視点を持つ立場の人々の協力のもと、ダンスにおける「老い」の仕組みを探求した。３年間を通して断続的に開催されたワークショップや稽古では、順繰りにウォームアップをリードする、互いの動きを真似る、異なる舞踊を声だけで教える等の活動が行われ、そこから出てきたアイディアが作品へと繋がっていった。これらの活動を基に、「型の向こうへ／声のレゾナンス」という最終公開研究会が 2023 年３月に京都府庁旧本館旧議場で上演された。 以上の３つの作品から、振付の枠を広げること、身体を呼び起こすこと、型を超えてエネルギーを循環させること、の３点を気づきとして挙げた。「老い」を含む作品づくりにおいて、型や上手さなどの概念が覆されることが多いという。世代や文化などの前提が違うことから、対話が成り立ちにくいこともある。通常の演出方法が当てはまらない場面で、対応策をとったり、ルールに基づいて即興で動いてもらうことによって、その人自身の動きが表出するというおもしろさに繋がる。 ドラマトゥルクとしてダンサーや作品と柔軟に関わる中島氏の、表現に対する熱意が感じられる講義であった。

〈学生のことば〉

・「老い」への漠然とした恐怖を完全になくすことはむずかしいけれど、年をとることに対するイメージはかなりポジティブなものに近づきました。高齢者を対象にしたワークショップの意義を考えた時、日ごろ悪気なく高齢者を「誰でも」の対象から外して考えてしまっていた自分に気づきました。年をとってできないことが増えるのは当然だと思っていましたが、「Trio A」のように誰かの小さな手助けや協力があればできることは格段に増えるし、常識や型を柔軟に変化させることさえすれば「老い」は可能性をつぶす要素ではないと知りました。　（神戸／ピアノ／１年）

・今回の講座を通して、「老い」は決してネガティブな言葉ではないと思った。今日、高齢化社会が進む中で、「老い」について考える機会は多くなっていると思う。「老い」は体の不自由、体力の限界、不健康など生活においてさまざまな障害をもたらす。しかしそれを受け入れ、なおかつ労わることで新たな表現が生み出されていくということに感銘を受けた。「老い」は、人生の積み重ねの上で発生してくるものだと思う。老いることで、それまでにはできなかった表現方法が生まれてくるのだと知った。ネガティブな枠にとらわれず、何ができるのか、新たな発見はないかを探し続けていくべきだと思った。　（神戸／声楽／２年）

・ダンス経験者でも未経験者でもみんなが表現できるワークショップの仕方は音楽と似たものがあると感じました。即興ダンスをすることで、自己表現ができる。だが指導の際にそれを体でなおしてしまうと個性が消えてしまう。そのため、体でなおすのではなく、言葉から連想して動きを伝えることで、個性をなくさないための指導を心がけているという話を聞いて、まさに音楽にも通じると思いました。音楽も自己表現の一つであり、より良くするためには指導の仕方が大事だと感じました。今後のワークショップの授業で、一つでもその方法を身につけたいと思います。

（東京／ピアノ／４年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 9　2024/04/11 22:31

2023 年度　第 4 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「誰一人取り残さない社会に向けて、芸術でできること」
講　師	島崎 徹（振付家、神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時	2023 年 6 月 23 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 エミリーブラウン館 B スタジオ（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	第 4 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、振付家で本学音楽学部舞踊専攻教授の島崎徹氏を迎えた。 島崎氏は、日本での幅広い活躍はもちろんのこと、世界一のバレエコンクールであるローザンヌ国際バレエコンクールにおいて、審査員やコンテンポラリー課題曲の振付を行うほか、アメリカ、フランス、ベルギーなど世界中の一流カンパニーからのオファーが殺到する振付家である。 今回で 4 度目となる島崎氏の講義は、鋭い視点とその熱量で、毎回学生の人気を博している。今年度の全体テーマをさらに広げ、「誰一人取り残さない社会に向けて、芸術でできること」について、島崎氏が感じていることを熱く語った。 社会から取り残されているのは、むしろ芸術家の方ではないかと島崎氏は切り込んだ。芸術を極めるにあたり、一般社会のルートと言われる進学や就職とは違い、物理的生産性のないルートに進んでいる。その「一般ルート」と「芸術家」のそれぞれで、幸・不幸を感じる割合は変わらない。生産性が求められる物質文明である現代は、我々人間の本質的な大切な何かを奪っていっているように感じるという。それは連帯感や帰属意識のようなもので、芸術はそれらの上にあるものである。芸術に進む人間を、現代社会はプロデュースしようとしていない。 例として、劇場で公演を観る時の目的の変化を挙げた。昔はバレエの演目や演奏曲目などの作品自体を目当てに劇場に赴いたが、近年は演者個人の超人的な技術や特殊な効果など、突飛な刺激を求めている傾向があるという。これは「舞台芸術」が本当に持つ力を理解しておらず、この道を進んでいくと、それこそ芸術家だけが取り残される世界になるのではないか。芸術家が自ら芸術を小さく狭め、深みを失わせていった結果、芸術家自身が取り残されてしまう。 とはいえ、それは全て怖くて悪いことなのであろうか。情報の影響力が強い昨今、我々は視野を広げて選択肢を増やすことができると言われるが、一方で大人数が一気に操作されることも容易い。芸術や創作をする人間は、その中でマジョリティの反対を進み、孤独な世界を持つことが必要であり、それが芸術・創作の種となる。 では、取り残された人間に芸術は何ができるのか。芸術家として人を救うためには、創造した人の苦しみ、そして取り残されている人の苦しみを感じなければいけない。苦しむ人間にしか聴こえない音や感じられないことがある。創造は、自身が感じているものがそのまま生まれるものであり、それ以上のものはできない。取り残された人を救う芸術をしたいのであれば、あなた自身が一度取り残されないといけない。取り残されることを怖がる必要はなく、その中で何を考え、何を創造するのか。いつかどこかで、自分と同じように苦しむ人間が自分の芸術に触れた時、その人の救済となれるようにと強く願って創造した人間が存在していたことを、常に意識しておかなければならないのではないか。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 10　2024/04/11 22:31

講座の概要	創造について島﨑氏は、既存の教科書などはなく、むしろそれは邪魔になるもので、新たに自分の教科書を作っていくことこそがクリエイトだという。テクニックはプロにとってはあって当然であり、なくてはいけないものだ。かといって、テクニックがあればプロの芸術家かといえば、そうではない。情緒に訴えかける力が芸術にあること、そのためにテクニックを習得しようとしていることを我々は忘れてはならない。 クラシックな芸術であればあるほど、表現に奥ゆかしさが求められることが多い。世界的にオープンな表現ができるようになってきている今日、まだ私たちの中には控えめさや奥ゆかしさがある。それを芸術にのせて表現できるように、さまざまな引き出しを自分の中に持てるように、一つ一つの行動を大切に意識して、と島﨑氏は熱く学生に語った。

〈学生のことば〉

・今回の講義では、表現者が表現することの意味について考えさせられました。私は毎日放課後に専攻や副専攻の練習をしているのですが、練習している際には、うまくなりたいとか、試験やレッスンが近いからがんばらなければとか、能力的なものに重点を置きすぎていると気付きました。音楽が好きで歌うことが好きだから音楽学部で勉強をしているのに、本来の目的を忘れてしまっていました。表現ができる人こそが、この世界で生きていけるのではないかと思いました。

（神戸 / 声楽 / ２年）

・今回の講義を聞いて、芸術が取り残されないために何か働きかけること以外に、独立した芸術という分野について人々と未来に対して働きかける方法も大切だと思いました。私自身、音楽をやっているからこそ他の人とは違う物事の捉え方や伝え方ができると思っていますが、具体的に他分野と何がどのように違うのか分からずモヤモヤしていました。しかし島崎先生が芸術は言葉の有無ではなく、アプローチする方向やその方法で感動する要素が変わるとおっしゃっていて納得しました。芸術と他分野との差別化を否定せずに、それぞれの物事に対するアプローチの仕方をもっと認め合えるようになれたらいいと思いました。

（東京 / 作曲 / １年）

・「誰一人として取り残さない社会を作るために音楽でできること」を考える前に、そもそも芸術家こそが、今の社会の中で取り残されていく立場になってしまっているという事実を改めて感じた。確かに、今の世の中、音楽一つをとっても、「どれだけ見栄えがすばらしい演奏をするか」で世間の評価が決まってくる傾向にあると私も感じていた。高度なテクニックを持った人が注目されるような時代、うわべのテクニックだけではなく、本当に奥深いところまで表現している芸術家は孤立してしまう。それでも、そのような「孤立した経験」をした人が作る音楽、演奏する音楽こそが、社会で孤立した人を本当の意味で救うことができる、というのは、私には新たな視点で、納得できる講義であった。私も人の心を動かせるような演奏、パフォーマンスができる表現者になりたいと思った。

（東京 / ピアノ / ４年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 11 2024/04/11 22:31

2023 年度　第 5 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 5 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽ワークショップの現状と課題」
講　師	大村 貴子（文化庁芸術文化調査官）
実施日時	2023 年 7 月 7 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	第 5 回「ミュージック・コミュニケーション講座」は文化庁芸術文化調査官の大村貴子氏を講師に迎えた。 大村氏は、東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、同大学院音楽研究科修了（応用音楽学専攻）。りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館（音楽制作担当）、東京文化会館（管理係、事業係）等での勤務を経て、2020 年より文化庁芸術文化調査官。 今回の講義では、「音楽ワークショップの現状と課題」をテーマに、大村氏がこれまで接してきたワークショップの実例や、現場と行政の両方の視点からの気づきを中心として語った。 はじめに、３つの実例をスライドと共にそれぞれ紹介した。 【1. 東京文化会館ミュージック・ワークショップ】 これは観客の年齢層を広げるために、劇場法・劇場の設置者である東京都の意向で始められた事業である。誰でも参加できる取り組みが劇場や地域に根づくこと、その結果が全国に波及していくことをめざす。各地で取り組みが広がり、10 年余りで 10 倍以上の方の参加を得られるようになったという。始めた頃を知っている者としては感慨深く、ワークショップリーダーの成長を実感したと述べた。 【2. 世界のしょうない音楽ワークショップ】 世界の多様な楽器を用いて、市民と音楽家との交流を図り、庄内地域の活性化に繋げる事業。楽器の経験がある人、ない人、子どもからお年寄りまでが一緒になって一つの作品を創る。自分が演奏するパートのメンバーと合わせ、他のパートナーとアンサンブルを行い、最終的には全員で発表し、ステップアップしていくことが、このワークショップの特徴だという。その活動をプロオーケストラや音楽大学、行政の各スタッフがさまざまな形でサポートする。管理職の方が現場に常にいて、協力して事業を行うワークショップとして、非常に珍しい事例である。 【3. 文化芸術による子供育成推進事業・ユニバーサル公演事業】 最後の事例は、昨日２月に埼玉県和光市内の公立小学校の特別支援学級で行われたワークショップ。ここでは「今、何をしているか・どんなことをやるのか」などを事前に説明することが重要だった。ワークショップ後には、コンサートが行われ、参加者は最後までそれぞれのやり方で楽しんで参加していた。演奏者の工夫や適性もあるが、学校との入念な打ち合わせが成功の鍵となったという。当日も児童の様子や反応をしっかりと観察し、選曲や演奏のアレンジに関して臨機応変な対応が重要だったと述べた。 ワークショップでは、リーダー、ファシリテーターの果たす役割が非常に大きいので、その担い手をどのように育成していくかが課題だ。コミュニケーションやプロデュースには経験が必要で、身近に良いお手本があることが大切である。東京文化会館の例では、リーダーの努力や劇場のサポートも大きく働いたが、

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 12　2024/04/11 22:31

講座の概要	活動をする中で課題にぶつかったり悩むこともあった。そんな時は、文化会館の職員同士で解決方法を探ったり、専門家を招いて学びの場を提供したりしたことで、リーダーの能力が着実に向上した。「人材をどのように育成し、モチベーションを維持していくかがワークショップ事業の大きな課題ではないか」と大村氏は述べた。 　ワークショップは、一般的に誰でも参加できることを目的にしている。そのため参加者から高額の参加費を取ることはなく、それによる収入は多くない。現在、各地でワークショップが実施されているが、それは文化芸術基本法や劇場法にのっとった取り組みであり、国や自治体の補助金や税金で賄われている。税金を使うためには、ワークショップと関わりのない人や音楽に興味がない人にも音楽ワークショップの意義を伝える必要がある。ワークショップの必要性やすばらしさを知ってもらうためには、客観的なデータや第三者による評価が必要になる。 　ワークショップの質の向上と同じように重要なのは広報だ。よい取り組みをしていても、それが知られていなかったら参加したい人にも届かない。参加したい人、これから知って参加したくなる人にも発信すること。そして、その事後の広報も同じくらい丁寧に行うこと。「そういったことを細かく重ねて行くことで、評価として返ってくる。それは事業を継続していく上で、とても重要なことだ」と述べた。 　最後に大村氏は「私がこれまでワークショップに関わる人たちを見てきて思うこと、そして彼らに共通していることは、ワークショップに対する情熱と、音楽に対する絶対的な信頼を持っていることです。皆さんには、いろんな場面において、社会の中で音楽を通じて、社会を良くしたり盛り上げたりしていく仲間になってもらえたらうれしいです」と講座を締めくくった。

〈学生のことば〉

・音楽をしていても、今後どういった仕事をしようか、どう活かすべきなのか分からない点がたくさんありましたが、今回の講座で音楽は本当に多種多様な分野だと気づきました。ワークショップについても、今後の機会や将来自分が企画して行う際に参考にしたいと思います。
（神戸／ピアノ／１年）

・ワークショップを行う上で、自治体や国などの行政との連携が欠かせないということを知りました。会場費や人件費、運搬にかかる費用などは国からの補助金、つまり税金によって賄われているため、より多くの人にワークショップのことを知ってもらい、より良い活動を行っていけるようにするべきであると思いました。そのためには、結果の提示や検証、効果などを明確にした学術的な裏づけが必要であること、第三者の目を通してワークショップの重要性について示すことが重要であることを学びました。　（神戸／声楽／２年）

・地方によって子どもたちや参加者の反応が違うので、そういった反応によって対応の仕方を変えること、特別支援や高齢者といった参加者の状況や状態を知るために事前に下見したり、綿密に打ち合わせをすることが大切であることが分かりました。音だけでなく目の要素も取り入れること、実際に音を鳴らすことで、何かそこから感受できることを体験してもらうのに意義があると思いました。現時点での課題を明確に話してくださったので、私たちがそういったことを解決するために、もっと経験や知識を身につけるべきだと感じました。
（東京／ピアノ／４年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 13　2024/04/11 22:31

2023 年度　第 6 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 6 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ：パリよりこんにちは、 　　音楽家というパフォーマー、やる気、行動力、運気を掴む」
講　師	唐澤 まゆ子（メゾ・ソプラノ歌手、神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2023 年 7 月 21 日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（神戸女学院大学のみの授業）
講座の概要	第 6 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、「ようこそ先輩シリーズ」で神戸女学院大学のみの講義として、卒業生の唐澤まゆ子氏を講師に迎えた。 唐澤氏は、1993 年神戸女学院大学声楽科を首席で卒業、同年、パリ国立高等音楽院声楽科に入学。在学中に指揮者ウィリアム･クリスティに見いだされ、ヨーロッパ・デビュー。2004 年ブルーメール賞、デビュー・オブ・ザ・イヤーを受賞。その後、バロック・オペラを中心にヨーロッパ各地の劇場や音楽祭等で演奏活動を続けてきている。 今回の講義では、唐澤氏が本学を卒業してから学んだこと、活動をしている上で大切にしていることを中心に、経験談を交えて多彩な話をされた。 唐澤氏が留学を考えたきっかけは、「自身の音楽がどう評価されるか、音楽が作られた場所が見てみたい」という思いからだった。当時は演奏経験も少なく、自分に自信がなかったという。音楽は浮き沈みがあり、自身の音楽に自信をつけるのは大変なことだ。自身が目標とする到達点に達成すると満足してしまうので、常に高い目標を設定して、前に進みたいと思い続けることが次に進む活力になり、自分にとって力になるのだと述べた。 留学先として拠点をフランスに選んだ理由は、「まったく違う文化で学びたい」という考えからだった。協調性を大切にする日本に対し、フランスはより自由な文化である。しかし、フランスと日本は互いに美術や芸術の影響を与えあっていることから、自分が作りたい音楽がフランスで見つかるのではないかと思ったという。卒業後、すぐに渡仏して、音楽院受験前の実技の先生探しやフランス語の勉強などだけではなく、大学入学後もたくさんの困難をのり越えてきたと語った後、フランス歌曲を演奏した。 【演奏曲目】H. デュパルク〈旅へのいざない L'invitation au voyage〉 唐澤氏は「近い憧れの人と、遠い憧れの人」をそれぞれ作っているという。近い存在で参考にできる人を見つけることや、成功した人の生き方などを参考にすると良い刺激になって飛躍に繋がると述べた。 唐澤氏は音楽院卒業後、自身の可能性を広げるために、日本での活動を考えた。そのきっかけとなったのが、フランスの夏の音楽祭「エクス＝アン＝プロヴァンス音楽祭」への出演だった。この音楽祭は日本公演が決定し、東京での引越公演を契機として、2003 年に大手レコード会社より CD デビューを果たすことができた。 唐澤氏が学生に「若い時の勢いはとにかくすごく、年齢が上がると、今までできていたのに、できないことが沢山でてくる。時間が経つのはあっという間なので、皆さんには今の時間を本当に大切にしてほしい」と熱く語った。 物事を成功させるには、まずいろいろなことに挑戦しなければならない。そのためには自身の得意なものと不得意なものとをはっきりと理解しなければならない。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 14　　2024/04/11 22:31

講座の概要	ここで学生から「自身をアピールすることが不得意」との声が挙がった。日本人は、真似ごとは上手だが、自身にあるものを引き出すことが苦手だ。それに対し外国人は表現豊かだが、決められたことを表現するのが苦手だ。音楽は人と違うもの、つまり自身の音楽観があるほど強みになる。そのためには、自分のアイデンティティを見失わないことが重要で、いろいろなことを試し、いろいろな人と交流を持つ経験が大事だという。唐澤氏は「日々の努力、いろいろな経験、行動力、そして自身の音楽に対する情熱が本当に大切だ。情熱というのは、どんなことがあっても人に伝わるものだ」と述べた後、イタリアのオペラ・アリアを演奏した。 【演奏曲目】G. ロッシーニ《セヴィリアの理髪師》より 〈今の歌声は Una voce poco fa〉 最後に「何事も、失敗することを恐れてはいけない。失敗の後には成功があり、何かあった時は、違う角度から物事を考えるのが重要。何があっても情熱さえ忘れなければ必ず新しいものが生まれてくる。それを忘れずに自分の音楽を作ってほしい」と講座をしめくくった。

〈学生のことば〉

・今回の講座では、私の専攻とする声楽家の方の貴重なお話を聞くことができて、良い経験となりました。唐澤さんのお話から、一歩踏み出す勇気を持つことが大切だと学びました。何をするにも勇気を持って行動すること。自分に満足が行ってしまったら、それ以上のものは作れなくなってしまいます。自分の一歩先の目標に向かって勇気を出して挑戦することが、自分の成長に繋がってくると学びました。（神戸 / 声楽 / ２年）

・今まで漠然としか考えていなかった自分の将来について、真剣に考えることができた時間でした。自分の通っている学校からこんなにも世界で活躍されている先輩が出ていると知ることで、自分もがんばろう、自分自身が誇れる存在になれるように今後の学生生活を考えながら過ごそうと思いました。自分の世界や音楽性､価値観を高め、見聞を広げるために、いろいろなことに興味を持ち、行動力を身に着けたいと思います。音楽だけにとらわれず、音楽以外の分野にもたくさん興味を持ち、経験を経て音楽にも幅を持たせることができるようになりたいと思います。

（神戸 / ピアノ / １年）

・初めて女学院の先輩からお話を聞いて、こんなに行動力のある人がいるのかと驚きました。恐れや躊躇いから行動を起こさずにいると、運も訪れないのだと気づき、自分の人生を振り返るきっかけになりました。自分のやりたい音楽を発信することと、求められている音楽を受け入れることに折り合いをつける大切さ、現状に満足せず目標とする音楽を追い続けることと、自分自身を適度に認めて折り合いをつける大切さ、そのどちらも生きていく上で不可欠だと思います。心を健康に保ち、音楽を大好きであり続けるために、忘れずにいたいです。行き詰まった時には、どうしたら前に進めるか自分で考えて試してみることが一番ですが、自分を支えてくれている人の意見を聞き、その中から自分に合ったアドバイスを選択する能力も必要なのだと知りました。

（神戸 / ピアノ / １年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 15 2024/04/11 22:31

2023 年度　第 7 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 7 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽教育と心理的安全性「より自分らしくなること」」
講　師	小森 輝彦（東京音楽大学付属高校校長、声楽家）
実施日時	2023 年 10 月 20 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	東京音楽大学付属高校校長、声楽家である小森輝彦氏を迎え、講義を行った。 小森氏は授業のはじめに、全国の美術高校の生徒数が増加傾向にあるにもかかわらず、音楽高校の生徒が半減している現状を取り上げ、我々の生きる現代社会が、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代であることを強調した。 今日、急速に変化する社会情勢とそれに対応しようとする日本社会の転換期にあり、音楽高校もその影響を受け、社会的価値が揺らいでいる状況にある。東京音楽大学付属高校では、教育ビジョンとして「音楽を主軸に、自分らしさを解き放ち、クリエイティブに生きよう」との方針を掲げ、「音楽」を教育するだけではなく、「音楽」を習得する過程で繰り返される試行錯誤に目を向け、失敗を肯定的にとらえる姿勢を提案している。 小森氏は、音楽に限らず日本の教育の傾向として、トップダウン的な教育制度による抑圧的な教育観であると語り、その危機感から「Teaching」から「Coaching」への転換の重要性を自身の海外での活動経験を踏まえて語った。日本の教育観を説明する上で、1946 年に出版された、スール・ベネディクト著の《菊と刀》から、恥の文化をとりあげ、東洋と西洋におけるメンタリティギャップについて解説された。伝師弟関係によって成り立つ芸術教育を認めつつ、協調性を重んじ、同一性が求められ、自らを伝統の中へ閉じてしまうことへの反省と、西洋的な思想を取り入れつつも、我々が何者であるか、文化的な背景の所在を考えた上で、音楽と向き合うことの重要性を提案していた。 学生からの「アナリーゼは理論として理解できるが、自信が持てない」との質問に対して、ゲーテの言葉から『自然から、その公然の秘密を打ち明けられ始めた者は、その自然の最もふさわしい解釈者である「芸術」に抗いたい憧れを覚える』を引用し、楽譜はある一定の情報を与えてくれるが、演奏者によって、同じ楽譜であっても同じ演奏にはならないように、解釈には幅があり、理論では語りつくせない部分も含む。公然の秘密として感じる感覚の追求と、西洋的な理論としての解釈の両軸を切り分け、解像度を上げていくことが必要であると語った。本来ならば、心理的安全性が担保された状態で、より自分らしく、あるがままの表現をすることが理想的であるが、トップダウン的な教育観によって、こうでなければならないと、理論を着ることで表現が窮屈になっている側面があると指摘していた。そのよい例として、耳を塞ぎ歌うと音程がよくなることを紹介し、良い音は、外側にあるのではなく演奏者自身の内側にあり、その可能性を信じることができるかどうかが重要であることを教えていただいた。音大生にとっては普段耳にする機会の少ない、ビジネス用語が多く取り上げられたが、現代社会と自らの立ち位置を広い視野でとらえる重要性を感じた。授業の最後に歌っていただいた、谷川俊太郎の《木を植える》では、思考と演奏が繋がる説得力のある演奏が印象的だった。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 16　2024/04/11 22:31

〈学生のことば〉

・耳を塞いで歌うと、音程が取りやすくなり、自分の声をしっかり聞こえる旨の話をされていたが、本当にその通りだと思う。耳を押えて歌った時のギャップはいいものだけではないと思うが、自分の声と向き合うためには必要なことのように思う。本日の講義で、自分自身の個性とは何だろうと改めて考え、そして自分を見つめなおす機会となりました。また。ピアノ演奏に関しても、自分が本当に突き詰めて自分自身をさらけ出せていないことがよく分かりました。

（東京 / 作曲指揮 /4 年）

・日本の「出る杭は打たれる」はどうなのか、と考えさせられる授業だった。付属高校の「音楽を主軸に自分らしさを解き放ちクリエイティブに生きよう」というビジョンはすばらしいし、この講義をしてくださった小森先生らしいものだなと思った。そして、アナリーゼが、一つ一つ切り離して解像度をあげて考えること、ということも印象的だった。音楽で心理的安全性を確保するためには、失敗ありきのトライをし続けて、ポジティブに失敗することが大切だと感じた。今後のレッスンでは、失敗を恐れてトライしないのではなく、失敗して当然と思ってトライをし続けたい。

（東京 / ピアノ / ３年）

・東洋と西洋の考え方の違いを知り、日本はまだまだ恥の文化があるのだと思いました。日本の教育は、先生の言ったことや大人の言うことを聞くこと、反発しないことがよいと感じさせられることがあります。怒られることを怖がって、挑戦することができない。また人と違うことを恐れるなど、とても共感する内容で、心理的安全性の重要性を考えさせられる講義でした。音楽は音楽を教えるだけでなく音楽で、ポジティブな失敗、多様性と共鳴、客観的に自分を洞察、美的衝動を鍛えるような教育を行うことを目的とし、来年の教育実習では心理的安全性のある雰囲気づくりから心がけていきたいです。

（東京 / ピアノ / ３年）

・今回の講義で、さまざまなジャンルにおいて心理的安全性がパフォーマンスの精度を高めるということを学びました。心理的安全性を高めると企業の経営においては業績を上げることができ、音楽においては自分らしさを解き放して、クリエイティブになることができます。今回の講義は先日のワークショップに深く繋がる部分があると感じました。ワークショップにおいてそれぞれの意見を受け入れる心持ちを全員が持っていたが故にさまざまなアイデアを引き出すことができたと思いました。この心持ちが結果的に心理的安全性を高めたと言えると思いました。

（神戸 / 声楽 / ２年）

・特に西洋の根本的な考え方と東洋の考え方の違いが興味深かったです。それが今でも私たちの考え方や感じ方の違いを引き起こすというのはとてもロマンがあります。

（神戸 / クラリネット / １年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 17 2024/04/11 22:31

2023 年度　第 8 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 8 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽アウトリーチで育まれるもの」
講　師	佐野 靖（東京芸術大学音楽学部教授）
実施日時	2023 年 11 月 3 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	第 8 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、東京藝術大学の音楽教育分野の教授で、「音楽アウトリーチ」の授業を担当されている佐野靖氏を迎えた。 佐野氏は、学生と共に音楽に触れる機会の少ない学校や地域へ音楽を届ける活動を行ってきた。今回の講座は、これまでの活動紹介と共に、ゲストとして東京藝大の卒業生で津軽三味線奏者の山下靖喬氏によるアウトリーチの実演も行われた。 はじめに、アウトリーチの概念と歴史的な流れについての基本的な説明があった。また、アウトリーチ活動の形態が幅広くなり、手法も多岐にわたっている現状についても紹介いただいた。近年、多くの音楽系・芸術系大学や教育系大学においてアウトリーチをカリキュラム化する動きが活発化していることを指摘した上で、佐野氏は、音楽大学の人材育成においてアウトリーチ活動は教育的な意義や可能性をもっていると語った。 続いて、佐野氏が担当する「音楽アウトリーチ」の授業についての紹介があった。同科目は、学部３年生以上および大学院生が履修することができ、音楽アウトリーチの企画・提案、実践を行うものである。この授業で目指している点について３点を挙げた。１つ目は、音楽（芸術）のすばらしさや楽しさを子どもたちや地域の人々らと共有することである。つまり音楽文化の振興と捉えられるが、アウトリーチ活動の中で最も重要な意義であることは言うまでもない。２つ目は、自己の分析・省察を通して新たな可能性や課題に気付くということで、大学の授業やレッスンでは得られない気付きによって、自己を探求することができる。３つ目は、さまざまな出会いや交流・連携を通して協働する楽しさを実感し、対話・コミュニケーション力や発信力を高めることである。音大生のキャリア形成において、社会との繋がりを持つことは重要であり、そのためのコミュニケーション能力の養成は不可欠である。これらの３つの目的は、ミュージック・コミュニケーション講座とも共通する点もあるが、音大生が在学中よりアウトリーチの活動を経験することによって、音楽家としての視野が広がり、キャリア形成のためのさまざまなスキルを体得できることを改めて実感した。 アウトリーチの実演として、山下靖喬氏が津軽三味線の演奏とトークを約 15 分間行った。学生たちは、演奏のクオリティと迫力に圧倒されると共に、対象に応じたトークの柔軟性や即興性、創り出す場の雰囲気を肌で感じることができた。限られた時間内ではあったが、《津軽じょんがら節》といった三味線の定番曲をはじめ、奏法の紹介、ゲーム音楽などをアレンジした即興演奏など幅広いジャンルの演奏と軽妙なトークを織り交ぜ、三味線の魅力のみならず、音楽の楽しさ、山下氏の人柄が伝わる実演であった。今回の実演から、単に演奏を聴かせるだけでなく、音楽を相手とどのように共有すると良いのか学ぶことができた。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 18　2024/04/11 22:31

講座の概要	実演後、山下氏から三味線を始めた経緯や、現在の活動についてお話があった。山下氏も学生時代に「音楽アウトリーチ」の授業を通じて経験を積まれ、現在ではコンサート活動に加えてさまざまな場でアウトリーチ活動を展開されている。第一線で活躍される山下氏のお話は、学生たちには大いに刺激になったことであろう。 最後に佐野氏は、アウトリーチの醍醐味は音楽交流にとどまらず人間交流にまで繋がるところにあると語り、アウトリーチ先で音楽以外の質問を投げられても、若手演奏家たちが真摯に答えたエピソードを紹介した。「本物とはどのような状況でも手を抜かないということ」という結びの言葉が印象的であった。

〈学生のことば〉

・相手の立場に立つことの大切さを感じた授業だった。演奏をする時にも、相手に演奏を聴かせるのではなく、相手と演奏を共有することが音楽のすばらしさであると思う。特に津軽三味線の山下さんのパフォーマンスでそれを感じた。お話をしてくださっている時には、一方的に話すのではなく、常に私たちと共有するように話しかけていた。それは相手の立場に立って話していることの表れであると思い、私も見習いたいと思った。

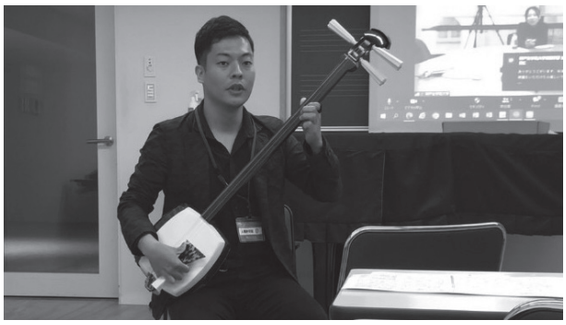
（東京 / ピアノ / ３年）

・事前に決めてきた曲だけを時間内に行うのではなく、その場にいるお客さんに寄り添って曲を決めたり、アドリブをして時間を繋げたり、おもしろいトークなど、自分がライブをする時に参考にしたいと思うところが多くありました。

（東京 / 作曲指揮 / １年）

・アウトリーチという言葉はよく耳にしていましたが、その具体的な活動と効果について考えたのは初めてでした。９月に行ったワークショップでも、みんなで一緒に音楽を作ることで音楽のすばらしさや楽しさを共有している実感はありましたが、そういった音楽文化の振興だけでなく、自分の内面に目を向けて分析したり、対話・コミュニケーション力や発信力を高めるという自分自身の成長のための目的が大きいことを知りました。普段舞台で演奏している時間は自分にとって充実していて好きですが、必ずしもみんなが楽しめる活動ではないことはよく分かります。相手によって演奏する曲を決めたり楽器を選んだり、曲をアレンジするといった事前準備にも工夫がいるし、目の前の人の反応によって臨機応変に対応することも必要になるので、音楽アウトリーチの経験を大学生のうちに何度かしておきたいと思いました。また、アウトリーチで育まれるものとして対話力というのが印象に残りました。聴衆のことを考えてプログラムを組むというのもその一つで、自分の好きな曲目と相手の望む曲目をバランス良く演奏することは、アウトリーチではもちろんプロの演奏家でも求められる力なのだと知りました。対話力というのは、言葉での会話がうまいということを指すのではなく、相手の立場を理解しようとすること、ただこちらの思いを押し付けるのではなくお互いの思いを聞きあえることだと認識し、これから先さまざまな人と関わっていく上で忘れないようにしたいです。

（神戸 / １年 / ピアノ）



※写真は東京音楽大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 19 2024/04/11 22:31

2023 年度　第 9 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 9 回ミュージック・コミュニケーション講座 「芸術の役割～ Nature Centered の視座の獲得～」
講　師	近藤 薫（東京大学先端科学技術研究センター特任教授、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）
実施日時	2023 年 11 月 24 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	近藤薫氏は東京音楽大学の非常勤講師であり、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターとしてオーケストラやオペラの公演のほかテレビの収録など様々な場で活躍している。また東京大学先端科学技術研究センター（先端研）の先端アートデザイン分野特任教授も務められている。今回は先端研での研究を中心に Nature centered（人間中心から自然中心へと視座をひらく）についてお話しされた。 はじめに、芸術と現代社会がすれ違っている感覚として文明開花について述べられた。近代化と共に技術が発達し､経済を効率的に動かすために都市化が生まれ、芸術が文化として拡散していった。そしてエンターテイメントとしての文化が増え、真の芸術とはまた違う拡がりをみせたという。教育化が進んだことで、価値観が収束し新しいアイディアが生まれにくい環境になりつつある問題を打破するために、芸術が必要だと近藤氏は述べる。 近藤氏は、芸術は答えがひとつではなく、語りきることができるものではないため争いが起きないと考えており、芸術活動ができるのは感性を持つ人間のみであると言う。人間は大脳が発達していることから認知能力があり、コミュニケーションが取れたため、集団行動をするようになり社会をつくることができたと語った。 次に、認知能力と芸術による自然との共生について実体験を基にお話しされた。近藤氏が 22,3 歳の頃、人前で弾くことができなくなってしまった時期に、自然の中で弾く機会がいくつかあったという。その際、演奏するとカラスが鳴いたり、ダイナミクスに合わせて風が強く吹いたりすることがあった。この体験は認知する力があるからだと述べる。これは演奏によって自然が変化したのではなく、外で音楽を聴くことで人間の耳が開き、いつも気にしていなかった自然の音の変化を認知するようになったからだという。これは円融無碍の考えに基づくとし、自然と調和する体験はとても心地よいということを体感してきたと語った。 続いて、クラシックの歴史をグレゴリオ聖歌から久石譲までを通してオーケストラの編成が拡張されていき、作曲家が新たな響きや演奏方法を次々に生み出していった変化を教示された。バッハは作品を演奏したりなど再現した先駆者、メンデルスゾーンは演奏会を公演化した人など歴史を追っていく中で、ジョン・ケージの《4 分 33 秒》という作品を挙げられた。4 分 33 秒間楽器の演奏はせず、聴衆はその場におきる音を聴くという作品だが、この作品が音楽と音楽以外を分けない精神を表している、まさに円融無碍の世界であると述べた。 最後に、これまでの思想はテクノロジーを使用し便利な生活を作っていく Human Centered な考えで課題解決をしてきたことで、閉塞感のある社会がうまれている。先端研では Human Centered の考えの基、自然と共生共存しながら

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 20　2024/04/11 22:31

講座の概要	社会問題を解決していきたいと締めくくった。芸術は蓮華の泥の中の根っこのようなもので、根っこがあるから感性と知性が育ちイノベーションがうまれていく。成果がすぐに分かるものではないが芸術の思想があらゆる分野に役立つ未来が訪れるかもしれない。

〈学生のことば〉

・西洋音楽を勉強していると、西洋の文化や思想に近づこうとすることが多いですが、今回の講座で東洋思想が持つ根本の大切さを知ることができました。これからは、「円融無碍」という言葉で表されるような、音楽もそれ以外のものも、自分と他者も、人間と自然も、すべてが必要であり大きな一つの繋がりであると考えられる東洋的な思想も持っていたいと思います。物事を分けて考えられるという人間の特性について考えたのも初めてで、今まで、人間が豊かで快適な生活を送るために自身と自然を切り離して考え、効率的な社会のシステムを維持するために価値観を同一化していく、といった仕組みに疑問や危機感を抱いたことはありませんでした。しかし、この方向性のまま突き進んだ先には何があるだろうと考えた時、人の心の機微や日常での様々な感情の揺らぎに目を向け、大切にすることからどんどん離れていくのではないかと思いました。芸術の力が、社会にとって前向きな効果を発揮できるよう考えていきたいと思います。

（神戸 / １年 / ピアノ）

・芸術という分野が科学技術と繋がるという考えが新鮮で、おもしろいと思いました。正直少しむずかしいと思ったのですが、進みすぎた科学技術をアートの根本として考えていくことにより、自然との共生を考えた社会になる、という理解をしました。西洋思想を次々と取り入れてきた日本ですが、本来の東洋思想を捨てずに将来のを形成していくことも大切だと感じました。科学という認知できるものと、芸術という感性で受け取るものにより、もっと人間と自然を分けずに、自然にとっても人間にとっても快適に暮らせる社会になればいいと思いました。

（神戸 / ２年 / 声楽）

・ジョン･ケージの《4 分 33 秒》は知ってはいたが、音楽と音楽以外のものを分けない、(西洋思想が行き着いた末の) 東洋思想の音楽であるという円融無碍の考え方ははじめてだった。確かに、静寂な環境となった演奏会場で聴こえる人の呼吸など、普段は全く意識しない音に心を向けさせることを意図したものだという考え方は、自然の中で演奏することで普段気にしていなかったカラスの鳴き声＝今までいらないと思ってた情報が認知されるようになるという点と似ているなと感じ、これが分けない思想なのだと思った。芸術と円融無碍は、考えることで分けてしまっている感覚もあり、心で感じるものなのか、今回の講義で考えるきっかけとなった。（東京 / 声楽 /4 年）

・この講義で芸術性と社会システムのすれ違いや文化活動の発展についてなど普段あまり疑問に思わなかった点を自身でも考えることができました。そして、日本の教育によって起きづらいとおっしゃっていたイノベーションについて、義務教育だけではなく家庭内教育の関わりも考えてみたいと思いました。（東京 / 作曲指揮 /1 年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 21 2024/04/11 22:31

2023 年度　第 10 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 10 回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（東京音楽大学）
発表者	東京音楽大学　学生
実施日時	2023 年 12 月 15 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	第 10 回は、2023 年 9 月 1 日に行われた、「音楽で作ろう、みんなの夏物語」2023年9月16日～9月18日に行われた、特別セミナーならびに音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」についての報告を行った。 音楽大学では、自らの経験や体験をプレゼンテーションする機会が少ない。今回は、プレゼンテーションに使うスライドや、原稿の作成を学生主体で行った。本講座の特徴として、ピアノを専攻とする学生が多い。ひとりの作業には慣れているが、プロジェクトを複数人で進捗を共有しながら進めることを経験する、良い機会になったのではないだろうか。ワークショップの中で起こるできごとは、ワークショップリーダー、そして子どもたちのふるまいなど、非言語でやり取りされることが多くある。言葉やスライドに頼りすぎることなく、実践者としての経験を、実演も交えながら発表することで、現場に聞き手を連れ出すような効果が得られたのではないか。発表を通して、実践者自らの言葉で語り、表現することの重要性を感じた。 東京音大では、毎週授業内で学年や専攻の垣根をこえて、即興演奏や、受講生同士のディスカッションを続けてきた。1 年間の積み重ねが、自らの主張を自信を持って発表することに繋がり、その成果が花開いた瞬間のような印象を受けた。

〈学生のことば〉

・私は、今回の授業で発表を担当させていただきました。夏に行ったワークショップ、そして特別講座のことを思い出しながら、発表させていただきました。プレゼンテーションの仕方、見やすいパワーポイントの作り方なども考え、学ぶことができて本当に良かったです。（東京 / ピアノ /4 年）

・東京音大の発表は、細かくワークショップを分析されていて興味深かったです。大人の方も含めたワークショップの方法を聞くことができ、私たちが行ったワークショップとは一味違った展開が起きていたことを知り、私も大人の方を含めたワークショップをしてみたいと思いました。パワーポイントの発表も、多くの写真や動画を使っていたため、実際にどのような内容でどのようにワークショップを進めていっていたのかを知ることができました。実際に作った音楽を聴いて参加した子ども達がワークショップを楽しんでいる様子が見られてとても良かったです。（神戸 / 声楽 / 2 年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 22　2024/04/11 22:31

2023 年度　第 11 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 11 回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学　学生
実施日時	2024 年 1 月 12 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	2023 年 9 月 20 日～ 23 日に神戸女学院大学で実施した第 11 回「音楽作りワークショップ特別研修」について、本学の履修生が発表を行った。 ４日間の研修について、アイスブレイクやグループワークの内容などをパワーポイントにまとめて報告した。主に最終日の第 11 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」について発表した（内容については p.30~33 参照）。今回のワークショップの全体テーマ “Our Lives” を子どもたちに発表したこと、さらに４グループに分けた手順や、グループワークでの工夫についての説明をしてから、実際に４グループがそれぞれ作った作品を記録映像で披露した。学生はワークショップを通して、自分から表現を豊かにする力や、他の人の発信を受け入れる力を身につけることができ、貴重な体験ができたと話した。 最後に、東京音楽大学の学生から、子どもたちの中で意見が多数出た時の対処法や、想定していなかったことが起きた時の対処法などの質問が出て、それぞれ質疑応答を行った。 発表した学生たちは、事前に資料や映像を集めてパワーポイントを作成し、分担して準備をしていたので、限られた時間内で分かりやすく発表することができた。

〈学生のことば〉

・今回のワークショップの発表では、ワークショップの内容を整理し、自分たちが学び得たものを改めて認識することができました。準備不足なところや、流そうとしていた動画を流し忘れてしまったところもありましたが、東京音大の方の質問や感想を聞いて、私たちが伝えたいことを、伝えることができたのではないかと思います。　（神戸 / 声楽 / ２年）

・４日間かけて行われたワークショップ特別研修の締めくくりである東京音楽大学への発表が無事に終わり、少し肩の荷が下りた気分です。客観的に見たワークショップの様子や取り組みを伝えつつ、自分たちの得た学びを共有するというバランスがむずかしく、必要な情報を的確に選び取って言葉とスライドにすることに苦労しました。この特別研修を通して、どんな風に感じたかというのが一人ひとり違っており、そのおもしろさが伝わるよう順番に感想を言っていくなどの工夫をしました。また、他のグループとは音楽を作る過程に違いがあるなど、この発表をすることで新たな気づきも得ることができました。事前に考えていなかった内容や自分の感想に触れたり、質問に対しても自身の意見をためらわずに言えたことで、この授業を通して得た経験で自分も成長できているのではないかと感じました。

（神戸 / ピアノ / １年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 23　2024/04/11 22:31

2023 年度　第 12 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 12 回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
実施日時	2024 年 1 月 19 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	第 12 回では、東京音楽大学から、秋学期の課題として取り組んでいた、インタラクティブ･コンサート（聴衆参加型コンサート）の企画についての発表を行った。東京音楽大学では、春学期に音楽ワークショップ、秋学期にはインタラクティブ・コンサートと､半期に分けてそれぞれの実践と企画制作を学んでいる。秋学期には、少人数のグループを組み、聴衆参加型のコンサートの企画を行った。インタラクティブ・コンサートでは、演奏する作品にまつわる、音楽的な要素（構造やリズム、その曲が持つ雰囲気など）を楽曲理解に繋がる足がかり（エントリーポイント）として提案する。音楽の入り口を、歴史や文化的背景からではなく五感を使い、音楽を身体の内側から理解をすることを試みる。いわば、美術館のキャプション的に理解をするのではなく、音楽そのものが持つ特徴をとらえようとする試みとも言える。 １つ目のグループは､ビゼー作曲オペラ《カルメン》より〈ハバネラ〉を取り上げた。聴衆とインタラクティブな取り組みの後に演奏をする想定で、ハバネラの曲中に繰り返されるリズムパターンに身体の動きをつけるワークを行った。遠隔ながら神戸女学院の学生にも参加してもらい、伝えることの難しさを実感しながらも、実践をする良い機会だった。 ２つ目のグループは、モーツァルト作曲《きらきら星変奏曲》と取り上げた。変奏曲は､主題の音型や調性がバリエーションごとに変化する。この変化によって、主題が持つ雰囲気や性格が異なる。その違いを独自に理解するためにいくつかのバリエーションを抜粋し、少人数のグループに分かれてディスカッションを行い、物語をつけた。発表では、演奏の合間に考えた物語をナレーションのような形で表現した。それぞれのグループが考える物語のユニークさも印象深かったが、演奏合間にナレーションを挟むことで、演奏者とナレーションの間に相互作用があることに気付かされた。物語によって演奏が影響を受け、また演奏によって物語の語り口も変化する。互いが呼応するように楽曲が理解されていく様が、インタラクティブコンサートの魅力の一つではないか。この聴衆へのアプローチはワークショップの考えとも共通して、トップダウン的ではなくボトムアップ的な場のあり方を提案してくれるものであり、ワークショップとインタラクティブコンサートの考え方が交差する瞬間のように感じた。 後半は神戸女学院からの発信で、ディスカッションの時間を設けた。今年度は東京と神戸の学生同士が意見交換をする機会が少なかったことから、神戸女学院の学生が用意したテーマにそったディスカッションを試みた。しかし学生や教職員の意向に相違があり、またオンラインでのディスカッションに慣れておらず、スムーズに行うことができなかった。オンライン上でのコミュニケーションは情報が一方向的になりがちであるジレンマは抱えたままであるが、より場所や時間を超えた繋がりでは、相手を思いやり行間を読もうとするコミュニケーションが

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 24　2024/04/11 22:31

	大切であり、リアルに会えることの重要性を再確認した。また、過去には両大学の学生が共同してワークショップを行った年もあることから、オンラインのみならず実際に交流する機会を考えていきたい。 　講座の結びには、今年度の全体テーマ「誰一人取り残さない社会に向けて、音楽でできること」から、音楽を職にすること、音楽によって人々を救うことについて、両大学の教員がまとめをし、学生らが音楽とともに生きる上で今後も考え続けていくべきテーマだとして、講座を締めくくった。

〈学生のことば〉

・総括の前の東京音大側のアクティビティは、ワークショップで学んだことが生かされている内容でとてもよかったと思いました。特に２つ目の変奏曲のいくつかのバリエーションを聞いて物語を作るというアクティビティはおもしろかったです。変奏曲がどのようなものなのかを幼い子でも分かりやすく学ぶことができるし、音楽のとらえ方を言葉にして表現することは想像力を膨らませる訓練にもなると思いました。グループで物語を考えることでグループワークにもなるので、音楽的な面においても教育的な面においても幼い子たちにとっていいものだと思いました。最後の総括では、お互いの学校で受けた授業で感じたことを共有できました。神戸と東京とで場所は離れていますが、この授業を通して同じ内容に関して考えたり学んだりすることができて、最終的にこの授業を通してコミュニケーションをとることができたと思います。東京音大の方も話していましたが、来年から神戸女学院のこの授業はキャリア専攻の必修になるので、その際にはもっと学生間でのディスカッションが実現できればもっと有意義な時間になると思いました。（神戸 / 声楽 / ２年）

・濃密に神戸女学院の方たちと交流できてとても楽しかったです。普段の授業でも、今回のように、神戸の方との交流がもっとできればよかったと感じています。中継で音がズレたりしながらも、一緒にインタラクティブ・コンサート企画のアクティビティを行い、楽しい時間を過ごせたのは充実していたし、分かりやすい伝え方などについても勉強になりました。「音楽」とは演奏家、もしくは作曲家の２つしかないと思っていましたが、この授業を通して、さまざまな職ややり方があることを知ることができて、視野が広がりました。
（東京 / ピアノ /4 年）

・神戸の方達の前で発表をして、実際に物語を考えてもらった活動を通して、遠距離の人たちと繋がることのむずかしさを感じました。しかし、発見もありました。インタラクティブ・コンサートなどを行うときは同じ場所にいる人たちとしか関わらない、と当たり前のように思っていましたが、コンサートを全国にとどまらず、世界の人たちが気軽に遠隔で楽しみ、音楽を共有できるのではないかと感じました。時差やタイムラグなどありむずかしいとは思いますが、それをもうまく利用したコンサートを作れるようになりたいと思います。
（東京 / ピアノ / ３年）

・他の授業とは違い、この授業では体を動かせて楽しかったです。音楽大学にいると、激しい競争、もっとうまくならないと、練習しないと、と考えている人が多いイメージです。前ほど音楽が楽しめない雰囲気の中、この授業は音楽の楽しさをまた思い出すことができました。
（東京 / MLA / ２年）

※写真は両大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 25　2024/04/11 22:31

第 13 回みないけキッズアーティスト　音楽で作ろう　みんなの夏物語

講座の名称	音楽で作ろう、みんなの夏物語
実施日時	2023 年 9 月 1 日（金）14：00 ～ 16：00
実施場所	東京音楽大学 池袋キャンパス
参加者数	東京音楽大学　ミュージック・コミュニケーション講座受講生 7 名 豊島区の小学生 25 名とその保護者

〈事業概要〉

本事業は、春学期のまとめとして、毎年池袋キャンパスの近隣の区民ひろばで実施していたが、今年度はスケジュールの都合上、池袋キャンパス内での開催となった。ミュージック・コミュニケーション講座を受講している 7 名が中心となり、「音楽で作ろう、みんなの夏物語」を主題に、タコの絵がモチーフの、アーティスト TAKO さんの絵を活用し、音楽創作を行った。

導入のアイスブレイクでは、参加者の様子や場の一体感を高めるために、リズムのコールアンドレスポンスや、名前を全員に呼んでもらうワークを行った。ワークショップリーダーを務める学生は、現場をリードするのは初めてだったが、大人数の小学生を前に緊張しつつも、堂々と場を率い、困った時には互いに助け舟を出そうとする姿が印象的だった。アイスブレイクの後半では、身体を使って夏の思い出を表現した。ワークショップの準備段階で、まずリーダー自身の創造性や大胆な表現が必要であると同時に、小学生の子どもたちに対して、私にもできるかもしれないと、完成度を高くしすぎないことも重要だ。リーダーにとっても、専攻楽器以外での身体表現に取り組むことは自身の殻を破る一歩になったのではないだろうか。続いて、学年が均等に分かれるように組み、三箇所に分かれて創作した。

創作にあたり、TAKO さんの絵を一枚選ぶが、一枚に選びきれず、複数枚の絵を選ぶグループがあった。絵は抽象的すぎず、具体的すぎず想像の余地のある絵を選択した。3 グループごとの音楽創作を終えたあとの中間発表では、お互いの音を聴き合い、各々に反省をする。他のグループから影響を受けた子どもたちは、もっとすごい音楽を作りたいと積極的になっていた。成果としては、オープニングとエンディングに夏物語のオリジナルの歌を歌い、間にグループそれぞれの作品を披露した。

ワークショップをはじめて率いた学生の感想として、子どもたちとコミュニケーションを取る楽しさと大変さがあった。子どもたちの発想の豊かさと個人の持っている能力の高さや、声量の大切さや説明力よりも子どもたちに「感じてもらう」ことの大切さ、グループワークでなかなか意見が出ない時の対処法についての感想が得られた。後日、保護者から「はじめてのお友達と珍しい楽器に触れ、1 つの作品を作り上げるすばらしい経験ができた」「絵から音楽を創るのはむずかしそうだと思っていたが、学生が上手く誘導してくれたことに加え、何よりも子どもたちが楽しそうに取り組んでいておもしろかった。先生やスタッフの方々、学生の人柄に感銘を受けた。音楽が育む人間力形成への影響について興味が高まった」など、肯定的な意見をいただくことができた。

※写真は東京音楽大学での様子です。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 26　2024/04/11 22:31

「2023 年度 特別セミナー」ならびに 音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう!」

（東京音楽大学実習報告）

講座の名称	「2023 年度特別セミナー」ならびに 音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」
講　師	デッタ・ダンフォード、ナターシャ・ジエラジンスキ （英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校 リーダーシップ修士課程修了生）
企画・司会	武石 みどり（東京音楽大学 教授）
実施日時	2023 年 9 月 16 日（土）16：00 ～ 19：30 9 月 17 日（日）10：00 ～ 12：00 / 13：00 ～ 18：00 9 月 18 日（月）10：00 ～ 20：00 / 13：00 ～ 18：00 最終日の 13：00 ～ 16：00 で音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」を実施
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス
参加費	ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生（卒業生含む）：無料 一般の参加者（上記以外）：5,000 円 18 日ワークショップ参加者：無料
主催・協力など	主催：東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座 協力：英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、神戸女学院大学 後援：目黒区教育委員会
参加者数	9 月 16 日 東京音大生 4 名、卒業生 1 名、一般 1 名 9 月 17 日 東京音大生 4 名、卒業生 1 名、一般 2 名 9 月 18 日 東京音大生 5 名、卒業生 1 名、一般 2 名 ワークショップ参加者：小学生 35 名、保護者 15 名

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通して誰もが持っているクリエイティブなアイディアや能力を引き出し、コミュニケーション能力やリーダーシップ等の力を実践的に身につけることである。

そのため、2023 年 9 月 16 日から 18 日までの 3 日間、英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生であり、フルーティストで作曲家のデッタ・ダンフォードとチェリストで作曲家のナターシャ・ジエラジンスキを講師として日本に招聘し、本学音楽学部生を対象とする音楽ワークショップ特別セミナーを実施した。

9 月 16 日、17 日は受講生を対象に研修を行い、最終日の 9 月 18 日には実際に子どもたちを交えた形で、「音大生と一緒に音楽をつくろう！」と題した音楽作りワークショップを実施した。

1 日目はアイスブレイクとして全員で円になりリーダーを模倣して体を動かしたり声を出したりする活動や、名前を音や動きで表現する活動などを行った後、講師から今回の特別セミナーでの目標として以下の 5 つを挙げられた。

「オープンな姿勢でいる、興味・関心を持つ、新しいことに挑戦する、自分自身が楽しむ、お互いに褒め合う」

またワークショップの大切な精神である YES, AND についてお話しされた。YES, AND とは、相手の意見を聞いたとき、否定せず、まずはいいね！と相手を尊重し受け入れる。それから、こうしてみよう！とポジティブに捉えることであると説明された。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 27　2024/04/11 22:31

次に、赤をテーマにグループに分かれて音楽創作を行った。受講生全員が異なる赤のイメージを持ち、おしゃれな赤や、情熱や闘いといった攻撃的な赤、お母さんのお腹の中という温かい赤など、様々な音楽が生まれた。

２日目もまたアイスブレイクから始まり、学生たちがリーダーを担当しながら行った。その後前日の宿題となっていた「自分が秋をイメージするもの」を持ち寄り発表し合った。落ち葉、栗、筆箱、ハロウィンなどが挙がり、なぜこれを持ってきたか、どんな思い出があるのかを発表した上で、これらを素材として音楽作りに取り組んだ。アイディアを出し合いながら、構成や音色を決めていき、人形がコスモス→落ち葉→栗→ハロウィンを順番に歩いていくというストーリーを作った。場面が変わる時に誰がどんな音を出すかなどを詳細に相談し、初めから終わりまでを指揮や合図なしで演奏することができた。

午後は講師たちが活動する上で大切にしていることとして「実践の理論」から４つの軸を紹介された。

①聴く…自分の音を聴く・相手の音を聴くだけでなく、心の声やその場の関係性なども観察すること

②創造性…多様な人々の意見を、YES, AND の精神で考えを広げ、居心地が良いと思う空間を作ること

③リーディング…「リーダー」「参加者」「素材」を巡って色々な立場に立ちながら流動的に進めること

④参加…参加の方法は均一でなくても良く、参加者がどのように参加できるか、したいかなどを考えること

次に、リーダーのパーソナリティに関する質問が多かったことから、自分のパーソナリティについて考えるワークを実施した。まず、自分に似ている動物について、自分の性格などと動物の性質や性格がリンクしていることを発表し合う。次に、挙がったワードをグルーピングして、６つのキーワードに分ける。自分の得意とすることが分かったことが、次の日の子どもたちとのワークショップに臨む糧となった。

２日目の終わりに次の日のワークショップのテーマを話し合い、“ 模様 ” をテーマに行うことが決定した。

３日目の午前中は、午後からのワークショップに向けた準備を行った。アイスブレイク､歌を教える、作品を１つにまとめるなどの役割が受講生たちに割り振られ、練習をした。

午後からは音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」を目黒区在住の小学生 25 名、保護者 15 名を対象に実施した。

会場には、少しだけ模様の描かれた大きな白い紙と、打楽器など多くの楽器が並び、参加者は会場に入ると紙に模様や絵を描き足したり、楽器を試したりして過ごしていた。

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 28 2024/04/11 22:31

全員が揃った頃に１つの円を作り、受講生進行のもとアイスブレイクを行った。次に、今回のテーマが模様であることを発表し、どんな模様があるか問いかけた。「しましま」「ぐるぐる」「ハート」などを事前に作っていたメロディーにのせて手で模様を描きながら歌った。

その後、小学生３グループと保護者のグループの計４グループに分かれて、音楽づくりに取り組んだ。はじめに模様などを描いた紙を４つに分け、それぞれ紙の絵からイメージを膨らませて約 45 分ほどで創作を行った。

創作ができあがったところで発表を行った。各グループの発表を聴いた後に、絵を見せながら作品を解説する時間と質問する時間を設けた。子どもたちは「この音、場面は何を表しているの？」などと積極的に質問していた。

最後に、模様の歌をみんなで歌いワークショップを締めくくったのち、グループごとに感想を出し合った。子どもたちから「すべてが楽しかった！」「次はこうしたい！」など、前向きな感想が出ていた。

数年ぶりにロンドンから講師を招聘してのセミナーは、実践の機会をなかなか得られなかった学生たちにとっても、参加した親子にとっても、クリエイティブな体験となったのではないだろうか。

〈受講生のことば〉

・ワークショップを進行するにあたり、進行の仕方やワークショップリーダーの役割について知ることができたのはもちろんのこと、どのような雰囲気作りをすれば楽しいワークショップになるか。ということや、話が行き詰まった時に、小グループに分かれて話し合いをしてみると話し合いが円滑に進むようになる、ということなども学ぶことができた。（東京／４年）

・皆が意見を述べながら、それをうまくまとめて一つのワークショップを作っているのを見て、私も物怖じせず意見を言いながらも、周りの人の意見も受け入れ、最終的にひとつの良いものにまとめられるスキルを磨きたいと思った。（東京／４年）

〈ワークショップ参加者のことば〉

・最初は不安そうだった子どもが最後はとても楽しんでいました。たくさん楽器があり、私自身も知らない楽器やはじめて知る楽器もあり楽しめました。ありがとうございました！（保護者）

・今までに体験したことのないアクティビティに参加させて頂き、親子共に貴重な体験となりました。数回、継続して通うようなプログラムがあっても嬉しいです。ありがとうございました。（保護者）

・内気なうちの子供にもグループワークでは話を振っていただいたみたいで、このワークショップが終わった後、興奮してその時の模様を教えてくれました。ありがとうございます。 父親である私にとっても小学１年生の娘にとっても、表現って自由で良いんだよって認められたような、音楽に留まらず、人生って良いよって言われたような、すごく素敵なひと時を過ごせました。企画や当日の先生含め、良い機会をくださいましてありがとうございました。心より御礼申し上げます。（保護者）

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 29 2024/04/11 22:31

音楽作りワークショップ特別研修」ならびに
第 11 回「音で遊ぼう!」子どものための音楽作りワークショップ

（神戸女学院大学実習報告）

講座の名称	第 11 回「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
講　師	デッタ・ダンフォード、ナターシャ・ジエラジンスキ （英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校 リーダーシップ修士課程修了生）
企画・司会	津上 智実（神戸女学院大学名誉教授）
実施日時	2023 年 9 月 20 日（水）10：00 ～ 16：00 9 月 21 日（木）18：15 ～ 20：00 9 月 22 日（金）17：15 ～ 20：00 9 月 23 日（土）8：45 ～ 16：00 ※「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」は最終日に開催
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生（卒業生含む）：無料 一般の参加者（上記以外）：5,000 円（全日参加） 子ども：無料
主催・協力など	主催：神戸女学院大学音楽学部 協力：英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学
参加者数	9 月 20 日 神戸女学院生 7 名（1 年生 3 名、2 年生 4 名）、卒業生 1 名、一般 1 名 9 月 21 日 神戸女学院生 8 名（1 年生 3 名、2 年生 5 名）、卒業生 4 名、一般 2 名 9 月 22 日 神戸女学院生 8 名（1 年生 3 名、2 年生 5 名）、卒業生 3 名、一般 2 名 9 月 23 日 神戸女学院生 8 名（1 年生 3 名、2 年生 5 名）、卒業生 4 名、一般 2 名 子ども 30 名（小学 1 年生 7 名、小学 2 年生 6 名、小学 3 年生 8 名、小学 4 年生 6 名、小学 5 年生 2 名、小学 6 年生 1 名）

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通して、誰もが持っているクリエイティブなアイディアや能力を引き出し、コミュニケーション能力やリーダーシップ等の力を実践的に身につけることである。

そのため、2023 年 9 月 20 日から 23 までの 4 日間、英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生であり、世界で活躍するワークショップ・リーダー 2 名、フルーティストで作曲家のデッタ・ダンフォードとチェリストで作曲家のナターシャ・ジエラジンスキを講師として日本に招聘し、本学音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ特別研修を実施した。

9 月 20 日、21 日、22 日は学生対象の研修を行い、最終日の 9 月 23 日には学生の学びの仕上げとして、子どもたちを交えた形で、第 11 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した（後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためコンサート・シリーズ」の関連事業として実施）。

1 日目は自己紹介を兼ねて、全員で円になり、講師の後に続いて真似をし、手や足、全身を使って合図に合わせてアクションを取るなどのアイスブレイクからスタートした。その後は足でリズム

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 30　2024/04/11 22:31

を取りながら、自分または相手の名前を呼びながらコール・アンド・レスポンスを行った。

次に参加者は用意されたさまざまな楽器や持参した楽器を使って、講師の合図に合わせて音を鳴らした。

その後、３つのグループに分かれ、他の人の演奏からインスピレーションを受けた即興演奏を行った。

その後、自分の好きなものや大切なものを持ち寄り、それについてみんなで話し合いを行った。これは、互いを少しずつ知るきっかけとなった。

２日目は、前半は講師のお二人の普段の活動や理念について、お話しいただいた。

後半では円になり、１日目に行ったアイスブレイクやコール・アンド・レスポンスなどの振り返りを行った。その後､全員でミーティングを行い､ワークショップのテーマを決め、そのテーマにそったボディパーカッションを作った。

この日は過去のワークショップに参加した人が関わったこともあり、学生たちは初日よりリラックスして参加していた。

３日目はさまざまの種類のアイスブレイクを行った。その後、２日目に作ったボディパーカッションに旋律と伴奏をつけ、ワークショップの基盤となる音楽を作った。子どもたちを迎えた時に誰がどのような役割を持って動くかを決めた後、学生役と子ども役とに分かれてリハーサルを行い、講師からアドバイスを受けたり、互いに意見を出し合って完成度を高めた。全員でコミュニケーションを取り合う様子が見られ、一人ひとりの積極性が感じられた。

ワークショップの音楽のテーマを “Our Lives” とし､「私が小さかった時」「私の中にあるもの」「私の好きなもの」「私が大人になったら」の４グループに分かれ、グループごとに音楽を作るという方針を決めた。講師から「当日は何が起こるか分からないが、柔軟に対応することが大事だ」とアドバイスを受け、学生たちの向上心に繋がった。

いよいよ最終日の９月 23 日は、小学１年生から６年生までの子ども 30 名を迎えて、第 11 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を開催した。子どもたちは、本学で用意した小物楽器や持参したピアニカやヴァイオリンを用いて音楽作りに参加した。初めての参加で緊張している様子の子どもや戸惑う子どもがいることを想定し、開始時間まで紙風船を用いて、学生や他の子どもと一緒に遊び、その時間を楽しんだ。

最初のアイスブレイクでは、円になって、リーダー役の人の動きや手拍子の真似をし、続いて自分の名前に音や動きをつけたコール・アンド・レスポンスを行った。次に、事前に用意していた音楽を演奏し、今回のワークショップ・テーマ “Our Lives” を発表した。さらに４つのグループ「私が小さかった時」「自分の中にあるもの」「私の好きなもの」「私が大人になったら」も発表し、テーマについて子どもたちが思いつく言葉をそれぞれ挙げた。この時、消極的な子も発言しやすいように、

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 31 2024/04/11 22:31

学生たちが細やかにサポートした。

次に、４グループに分かれて活動を行った。それぞれのテーマにそってアイディアを画用紙に書き出し、それを基に楽器を鳴らして、音楽を作るというグループワークを行った。

その後、再び全員が集まり、各グループで作った音楽をシェアし、これらをどのように組み合わせて演奏すればより良いものになるかを話し合った。全員での練習を繰り返し、その合間にも意見が出されて更にブラッシュアップを行い、一つの大きな曲が完成した。

ワークショップの締めくくりとして、保護者が客席で見守る中、作品発表が行われた。家族が見ている前での演奏では、子どもたちも張り切って生き生きとしており、練習の成果以上のものを披露することができた。保護者からも大きな拍手をいただいた。

最後に、今日のワークショップについて、受講生と子どもたちとでの振り返りを行った。子どもたちは楽しかったことや印象に残ったことを、紙に絵や文章で書き記した。

子どもたちが帰った後、受講生と講師はワークショップ全体についての反省会を行い、感想や意見の交換を行った。

〈受講生のことば〉

・今回の講座を受け、音楽のもつ無限の可能性を改めて感じました。大人も学生も子どもも全員が音楽に触れて、自分のアイディアや感情を共有できるという経験は、私自身の考えに大きな変化を与える場となりました。「音楽」というと明確なメロディーを持つものだという考えが強かったのですが、それに縛られずに、音楽が本来持つ魅力を再発見することができ、音楽は第一に「楽しむ」ことが大切だと分かりました。私は声楽を本格的に始めたのが高校２年生の冬で、みんなより劣っているとか、下手だと思いながら練習をすることが多く、練習が楽しくないと思い続けていました。今回、音楽を楽しむことを再認識して、練習を楽しくすることができるようになりました。ワークショップの場は、みんながお互いを尊重し受け入れ合って、温かくすばらしい場所でした。今後、このような活動に参加したり、開催する立場になった時に、今回のような雰囲気作りができたらいいと思いました。（声楽／２年）

・子どもたちになじめるか、なじんでもらえるかが不安でしたが、うまくいったと思います。とても勉強になりました。（クラリネット／１年）

・初めてのワークショップで不安が大きかったのですが、皆さん良い人ばかりで、日を追うごとに不安は期待へと変わっていきました。当日は久々の小学生との交流でむずかしいことや、思っていた方向に進まなかったこともありましたが、私も楽しく過ごすことができました。音楽の力を実感して、音楽をしていてよかったと思える時間でした。お昼休憩時に子どもたちと一緒に過ごしたことで、お互いに心を開くことができた部分がありました。やはり誰かと食事をするのは大事なことだと学びました。（ピアノ／１年）

・私はワークショップ講座で求められる力、すなわち自己の心のうちやアイディアを発信し共有することに不安がありました。加えて、自分が動きや音の先導をする立場になるのはもちろん初めてのことで、順番が回ってくることにひどく緊張していました。そのため、子どもたちとのワークショップの当日は、まちがいは絶対ないという空気感とレスポンスとを心から楽しむことを心がけまし

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 32 2024/04/11 22:31

た。このような発信は、回を重ねて慣れていくことも大切ですが、誰かがそれを好意的に受けとってくれていると思えた時に、効果が何倍も大きくなると感じました。ワークショップの実践を通して、音楽は誰の心にも溢れていて、共通のお題であってもまさに十人十色、各自から流れる音楽に異なる魅力があることを実感しました。自分が思う景色や様子をイメージしてすぐに音楽表現を考えるのは予想以上にむずかしかったけれど、熟考する時間がない分、行き当たりばったりで思い切って音を出してみるのも、一期一会のような音楽の発見があり、即興で合わせることへの不安な気持ちも減りました。（ピアノ／１年）

〈保護者のことば〉

・子どもたちがそれぞれ真剣な眼差しで、心わくわくしている感じが良かったです。初めて会った友達なのに、一体感があったことに驚きました。（保護者）

・皆さんで考えて作りあげられたのがよく伝わりました。テーマの説明もあり、分かりやすかったです。各グループや全体での発表があってよかったです。各グループでは自分の子の音が分かりやすく、全体での発表はとても迫力がありました。（保護者）

・どのような作品ができるのか想像もつかない中、多様な楽器の音がひとつになって、楽しくなる作品でした。皆さんが自然な笑顔で夢中になっているのが感じられました。（保護者）

・生き生きと、皆さんでいろいろと考えて作り上げられたことがよく伝わってきました。こんなにユニークな作品は唯一のものだと実感しました。きっと子どもの心に残ると思います。（保護者）

〈スタッフのことば〉

・初めは不安そうに参加している学生も多かったが、ワークショップを通して自身の殻を破り、積極的に意見を言ったり、進んで行動している姿を見て驚いた。ワークショップの振り返りを行った際には、自身の成長できたことや、貴重な体験ができたなどの感想を聞くことができ、本当によかった。（スタッフ K）

・コロナ禍後初のワークショップだったため、参加した学生は経験者がほとんどいなかったが、数日間で見違えるほど積極的に意見を言えるようになっていて驚いた。子どもたちの受け入れ態勢などに反省点があったため、来年度に生かしたい。（スタッフ T）

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 33 2024/04/11 22:31

おわりに

2009 年にスタートした３大学の共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、文部科学省の「戦略的大学連携支援プログラム」採択による補助期間の終了後も歩みを止めずに、2015 年度からは東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部との２校で継続してきました。年度末に両校で協力して作成する報告書も、これが 15 冊目となりました。

2019 年来の新型コロナ・ウイルス感染症の世界的蔓延によって、音楽界や教育界も大きな打撃を受けてきましたが、昨年５月の５類移行によって、演奏や教育の場にもホッとした空気と活気が戻り、９月には英国ロンドンから２人のすぐれたワークショップ・リーダーを招聘して、東京と神戸でワークショップ特別研修を実施することができました。昨年のリベンジをようやく果たした形です。

さらに、この 15 年の積み重ねの中で育って力をつけた卒業生たちが各地で活躍するようになり、その姿を目の当たりにする機会も増えました。「継続は力なり」を実感するこの頃です。

困難な日々を超えて、本プロジェクトを継続・発展させてくることができましたのは、一重にお力添えいただいた皆様方のお蔭です。この１年間の活動をここにご報告申し上げると共に、本プロジェクトにご協力いただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

2024（令和６）年３月

津上智実（神戸女学院大学 名誉教授）

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2023 年度　活動報告書

2024 年３月発行

発行者　東京音楽大学　連携センター
〒 171-8540　東京都豊島区南池袋 3-4-5　B1005
Tel/Fax：03-3982-3227
Mail：music.communication.tcm@gmail.com

編　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
東京音楽大学　連携センター

表紙・本文デザイン　上條浩史

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 34　2024/04/11 22:31

余りページ

余りページ

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 3 2024/04/11 22:31

2023_報告書本文_cc2022_0229.indd 4 2024/04/11 22:31